原教界

第18期　2007年 12月號

原住民族教育情報誌

Aboriginal Education World

2005年7月1日創刊　2007年12月1日出版

指導委員　杜正勝　教育部 部長

夷將・拔路兒 Icyang・Parod　行政院原住民族委員會 主任委員

編輯顧問　陳清溪　國家教育研究院籌備處 主任秘書

林江義　行政院原住民族委員會 主任秘書

伍約翰　南投縣信義鄉信義國民小學 校長

汪秋一　行政院原住民族委員會教文處 處長

邱維誠　教育部教育研究委員會 專門委員

洪若烈　國家教育研究院籌備處 課程與教學組組長

洪清一　花蓮教育大學特殊教育學系 系主任

洪進雄　嘉義大學台灣原住民族教育及產業發展中心 主任

孫大川　政治大學台灣文學研究所 副教授

浦忠成　國立台灣史前文化博物館 館長

高淑芳　新竹教育大學教育心理與諮商學系 系主任

張中復　政治大學民族學系 副教授

張建成　台灣師範大學教育學系 教授

張駿逸　政治大學民族博物館 館長

康培德　花蓮教育大學人文社會學院 院長

陳枝烈　屏東教育大學初等教育學系 教授

游純澤　台北縣汐止市金龍國民小學 校長

童春發　東華大學原住民民族學院 院長

馮朝霖　政治大學教育學系 教授

熊同鑫　台東大學師範學院 院長

趙順文　台灣大學日本語言學系 系主任

蔡中涵　台灣原住民教授學會 理事長

譚光鼎　台灣師範大學教育學系 系主任

發行人　何福田　國家教育研究院籌備處 主任

總編輯　林修澈　政治大學原住民族研究中心 主任

執行主編　黃季平

編輯委員　黃季平　王雅萍　李台元　陳誼誠

編輯助理　勞賢賢　鄭婉春

採訪記者　廖彥琦

美術編輯　李雅雯　鄭婉春　陳誼誠

封面構思　林修澈

出版單位：國家教育研究院籌備處
地址：台北縣三峽鎮三樹路2號
電話：（02）8671-1111
傳真：（02）8671-1274
網址：www.naer.edu.tw

出版單位：行政院原住民族委員會
地址：台北市大同區重慶北路二段172號
電話：（02）2557-1600
傳真：（02）2557-2432
網址：www.apc.gov.tw

編輯單位：政治大學原住民族研究中心
地址：台北市文山區指南路二段64號
電話：（02）2939-3091#51437
傳真：（02）8661-8277
網址：www.alcd.nccu.edu.tw
印刷：立華出版有限公司

政大原住民族研究中心

愛努的民族發展

アイヌの民族発展

The Development of Ainu

編輯室

原教界發行第18期，已經是滿三年了，本期的原教界，本著對原住民族的關心必須由國內延伸到國外的信念，以台灣政治大學原住民族研究中心與日本北海道大學アイヌ・先住民研究中心簽約合作為契機，我們以「愛努(阿伊努)的民族發展」為主題做專輯，算是對三年經營原教界的一個結束，也是一個新的開始。

政大原住民族研究中心和北海道大學アイヌ・先住民研究中心簽約，展開長期的學術合作，用「Aynu民族」專號開始，不失為一個好的選擇。由於台灣大眾對Aynu民族的瞭解有限，導致我們製作這個專輯的構想，事實上台灣原住民族在對外上與日本Aynu民族在對外上，雙方都把對方列為首批名單，台灣已經形成「知Aynu」的小眾，是本期的執筆者。日本對於台灣並不陌生，只是對於台灣原住民族卻不留印象，但是本專號日本方面的作者，半數以上都有來台的經驗，全部有接待台灣原住民族相關事務人員的經驗。連結兩邊的小眾一起共同交談，這正是實踐學術合作的開端。

18期和前面幾期完全不同，從頭到

編集室の『原教界』第18号をもって、発行満三年になった。今号の『原教界』は原住民族への関心は国内から国外へと広げるべきだという信念から、台湾政治大学原住民族研究センターと北海道大学アイヌ・先住民研究センターの協定を契機として、「アイヌの民族発展」特集をもって、三年間の『原教界』運営の締めくくり、また新しい始まりとなった。

政治大学原住民族研究センターと北海道大学アイヌ・先住民研究センターの調印は、長期の学術協力を展開していくこととなるだろうが、「アイヌ民族」特集号をもってそれ始めるのは、悪くない選択だといえる。台湾の人々のアイヌ民族に対する理解には限りがあり、この特集の構想もその影響を受けた。実際に台湾原住民族やアイヌ民族の対外交流では、それぞれお互いをリストのトップに置いている。台湾にはすでに「アイヌを知る」人達が現れつつあり、その人達が今号の執筆者となった。日本は台湾にとって不案内な場所ではないが、台湾原住民族にとっては特に印象にないところである。ただし、今号の特集において、日本側の執筆者は半数以上が台湾に来た経験を持ち、全員が台湾原住民族関係の事務官を接待した経験を持つ。双方の人達をつなぎ、共に語り合うことが、学術協力の実践の開始なのである。

第18号は以前と違い、始めから終わりまでアイ

政大原住民族研究中心

尾都在討論愛努民族，將其介紹給台灣的讀者，也算是拓展視野。我們共邀請 22 篇稿件，有 8 篇是台灣人撰寫、13 篇日本人撰寫、1 篇在日美國人撰寫，因此本期雜誌採取雙語呈現的方式，寄望雙方讀者都可以同時瞭解對方的認知與思考。然而這是個辛苦的過程，以前只需要邀稿編排，現在多了翻譯的問題，尤其是執行貼近原文的直譯，增加校稿的工作量，從人力到時間，對我們來說都是艱苦的考驗。本期稿件較多，又採雙語對照，於是篇幅膨脹到每期正常頁數的一倍半。這也算是本刊對於推動台日雙方學術合作的誠意。

在翻譯過程中，我們發現有些名詞台日雙方的用法有極大的差距，有進一步闡釋的必要。對於原先居住的民族到底要叫「原住民」還是「先住民」，眾說紛紜，莫衷一是。在日本「原住民」這個詞有貶意，甚至在媒體上也禁止使用，因為含有歧視的意味，所以日本是在「原住民」與「先住民」之間謹慎考慮之後，採用「先住民」。但是台灣相反，台灣認為「先住民」一詞有歧視的意思，於是在「先住民」與「原住民」謹慎考慮之後，採用「原住民」。雖然雙方看法有分歧的地方，但尊重「原先住民」的立場與用意，其實是一致的。本期「原教評論」林江義的〈再思「先住民？」—愛伊努族的名稱〉，是從台灣原住民的角度來看日本先住民，因此

ヌに関する討論であり、台湾の読者にアイヌ民族を紹介し、視野を広げるものになったといえる。22にわたる文章をお願いしたが、そのうち8つは台湾人が、13は日本人が、そして1つはアメリカ人が書いたものである。そのため、双方の読者がお互いの認識や考えを同時に理解できることを期待し、今号はバイリンガル表記という形態をとった。これはとても大変な作業であった。以前は執筆依頼と編集のみだったが、今回は翻訳の問題が増えた。特に、原文に添った直訳をするため、校正の量が増え、労力から時間まで、全てが私たちにとってつらい経験であった。今号は原稿が多い上、対訳にしているため、スペースが普段の1.5倍ほどに膨らんだ。これも日台双方の学術協力を進めるに当たっての本誌の誠意と言えるだろう。

翻訳の過程で、日台双方の言葉の使い方の隔たりが甚だしいことに気が付いたが、これについてはさらに踏み込んで解釈をする必要がある。元から居住している民族を「原住民」と呼ぶか、「先住民」と呼ぶかは諸説紛々で、意見をまとめることができない。日本では「原住民」という言葉は否定的な意味であり、マスコミでの使用が禁じられているほどである。なぜなら蔑視の意味を持つからである。そのため日本では「原住民」と「先住民」について慎重に考慮した後「先住民」という語を採用することにした。しかし台湾では逆に、「先住民」という言葉は蔑視の意味を持つと考えられるため、「先住民」と「原住民」について慎重に考慮した後、「原住民」を使うことにした。双方の見解は分かれたが、「元の住民」という立場と意味を重視している点では一致している。今号の「原教評論」では、林江義氏が「『先

政大原住民族研究中心

文章有比較強烈的批判。我們在這裡特別提出這個概念的解釋，剛好也可以提供大家來思考兩種語言對於同一詞彙的不同語感所呈現出來的問題。

另外一個被凸顯的問題是，「Aynu」的漢語譯名到底是叫做「阿伊努」還是叫做「愛努」？這個問題也是眾說紛紜，莫衷一是。按照愛努人的說法，這個字是兩個音節，所以應該是愛努。但是如果按照日本語的發音，聽起來是三個音節，因此寫成阿伊努也不能算錯。台灣剛好流通的是「愛努」，兩個音節；中國流通的是「阿伊努」，三個音節。當然，要使用哪一個譯名比較妥當，應該是本民族自己來做決定，不過因為在稱呼上面給我們帶來很多的困擾，其實我們也很難去處理該怎麼做。本刊是尊重所有的作者，讓他們各自表述，也提供一個平台讓不同意見的聲音呈現出來，期待這樣的過程可以提供給本民族在選擇一個固定的漢語名稱時做參考。

我們這次的專號，有三項很大的展現。第一，把「原住民 vs 先住民」這一組概念做相當聚焦的闡述。第二，把「愛努 vs 阿伊努」這個名稱的問題集中凸顯。第三，把「日本 & 台灣」的相關人士做相當規模的動員。在這個刊物，大概也可以代表呈現雙方對於 Aynu 民族問題的看法。

住民』再考―アイヌ族の名称」で台湾の角度から日本の先住民を見ているため、文章の中では比較的強烈な批判をしている。ここでは特にこの概念の解釈を持ち出すことで、2つの言語の同じ言葉に対する双方の語感の違いによって表れる問題について考える場を皆さんにも提供できたことであろう。

また、もう一つ目立った問題は、「Aynu」の中国語訳は「阿伊努」か「愛努」か、ということである。この問題も諸説紛々で意見をまとめることができない。アイヌ人の言うところによるとこの語は二音節なので、「Aynu」とするべきである。しかし日本語の発音では、三音節に聞こえるため、「アイヌ」でも間違いではない。台湾では二音節の「愛努」で通っているが、中国では三音節の「阿伊努」を使っている。もちろん、どの訳語を使用するべきかはその民族自身が決めるべきである。しかし呼び名にはかなり困惑させられ、どう処理すればいいか悩まされた。本誌では全ての作者を尊重し、各自それぞれ叙述してもらうことにし、いろいろな意見や声を発表する場も提供した。このような過程を当該民族に提供することで、決まった中国語名称を選択する際の参考にしてもらうことができれば、と思う。

今回の企画では顕著な項目が3つあった。一つ目は、「原住民vs　先住民」の概念で、これについて焦点を当てて詳述した。二つ目は「愛努vs阿伊努」であり、この名称の問題を集中させて目立つようにした。三つ目は「日本＆台湾」の関係者に対して相当な規模の動員を行ったことである。本誌は双方のアイヌ民族問題に対する見解を著した代表作となることだろう。

政大原住民族研究中心